

## 当時を思い出して

夜行列車、地方鉄道、ケーブルカー、バスに乗り継いで弥陀ヶ原に到着。

当時は弥陀ヶ原がバスの終点で、そこで体勢を整え、歩き出す。

高原状であり勾配はないが、寝不足と重荷で遅々とした足取りで、天狗平を通り、本日の野営地の室堂に着く。

現在であれば、室堂までバスが来ている。

疲れからかK君がポリタンクの石油を水と間違えて、飲み、慌てて吐き出す。

腹痛を危ぐしたが、大丈夫のようでホッとす。

その夜は皆ぐっすり寝込み、翌7月26日の朝は雪溪のとけた冷たい水で顔を洗い、米を磨ぎ、水を汲み、朝食の準備をした。

食事が済むと、つらい食器洗いとなった。

再び、手が切れるような冷たさで、誰もが手と指を震わし、奇妙な運動をする。

各自、パッキングをして、ラジオ体操をした後、気合を入れて出発となった。

これが出発前のかかさぬ日課である。

全員、元気に一の越に着き、立山に登ったと思うが、残念ながら、40数年経った現在、確かな記憶はない。

竜王岳に登り、鬼岳を巻いて獅子岳に着く。

ここからザラザラの坂をジグザグに下がったところがザラ峠で、登り返して五色が原に到着し、テントを張る。

計画前に楽しみにしていたザラ峠も高山植物が咲き乱れる五色が原もほとんど記憶にない。

翌日は完全な雨で、鳶山より越中沢岳を越え、何度も上り下りを繰り返す、びしょぬれになり宿営地のスゴ乗越に到着。

スゴ乗越は高山地帯から下った樹林帯に位置しており、見晴らしもなく、本日の行程が期間中最悪で、文字通り皆で嫌な意味で「すごいな」と言い合った。

とりあえず、牛肉の切り身を味噌の中から取り出し、うきうきしながら焼いた。

焼肉(味噌焼き)は、行程中、一番のご馳走で、ソーセージなども持ってきていたが、すべて魚肉で本物の肉は今日が最初で最後であった。

しかし、辛くて、食欲旺盛な我々も、うまいとは思わなかった。

安い肉の味噌漬は乏しい費用から、肉屋で買い、味噌にまぶし、新聞紙にくるんで菓子の缶に入れた我々ドシロートの手製であった。

翌朝の味噌汁は新聞紙入りとなり、具の中に余分な一品が増え、苦勞しながら飲む。  
ヤギでないのが残念。

朝食後、当時北アルプス最奥の山と言われた「薬師岳」に向かうことになった。  
当時、まだ「薬師岳」へは有峰ルートが出来ておらず、どこから行っても、最短でも3日はかかった。

出発して、しばらくして樹林帯を抜けたが、7月28日も天候は回復せず、見通しは悪かった。

間山を越え、尚も登り続け、砂礫地帯を行く頃には皆かなり疲れていた。

ようやく、登頂して喜んだのもつかの間、そこは北薬師岳であった。

「薬師岳」はまだまだ先であった。

痩せた岩稜を濡れた重いザックを担ぎ、さらに苦しい登りを続ける。

もうすぐそこだと雨に叩かれた隊員を励まし、最後の力を振り絞って頂上に着くと、その先にさらに高い山があり、皆、疲労の頂点にあった。

何回かのニセピークを越え、やっと、薬師岳(2926m)頂上に到着したときはほんとうにうれしかった。

我々以外に誰もいない頂上で記念撮影したが、視界はきかず、高橋さんが写してくれた7人のサムライの勇姿は少しぼやけている。

山頂からは砂礫の斜面を下り、薬師平に出て、やがて、草原が広がる太郎兵衛平に着き、テントを張ることにする。

7月29日。山に入ってから5日目。

太郎山を過ぎて、草原を下って、北ノ俣岳(2662m)の登りにかかる。

本日は珍しく午前中は晴れわたり、どこまでも続く高山植物が残雪と相俟って、とても美しい。

皆も心もち、足が軽やかなように感じる。

さすがに北アルプスの奥地だけにほとんど登山パーティに出会わない。

ただ、帝京高校山岳部のメンバー(約15名)とは毎日同じ行程で、抜きつ抜かれつで槍ヶ岳までキャンプ地も同じである。

この長い縦走には、たまには大学山岳部に会うことはあるが、帝京高校以外の高校の山岳部には会わなかった。

彼らは全員制服で、持ち物も組織化され、洗練され、さすがに東京人と感心した。

それに比べ、我々貧乏部隊は、なりふりはおかまわず、服装もばらばらで、唯一、日吉ヶ丘山岳部と書いた麦藁帽と「ファイト！ファイト！ヒヨッサン！」という掛け声だけが統一されたものであった。

この後、この帽子を見て、「日吉ヶ岳」はどこにあるのかよく聞かれた。

そのような山は日本中どこにもないので、その都度、説明していたが、だんだんと面倒

くさくなってきた。

北ノ俣岳から赤木岳を通過して、黒部五郎岳の大斜面に取り付く。

黒部五郎岳(2840m)は大きい山体という印象があるが、40 数年たった現在、登頂した以外はほとんど覚えていない。

宿泊も多分、五郎平だと思うが、定かではない。

今思うに、もう少し、写真を取るべきであったが、当時はフィルム、現像ともに高価で最小限にとどめたのが悔やまれる。

また、北アルプス最奥の楽園といわれていた「雲の平」にはすぐそばにあったが、日程上割愛せざるを得なく少し残念に思った。

その後、雲の平へはすぐにも、行くつもりであったが、実現できたのは実に 42 年後であった。

それでも、皆、北アルプスのど真ん中を皆が歩いていた。

誰も、私以外は北アルプスの経験はまったくなかった。

私も、立山、剣、白馬といった北ア北部だけしか知らず、リーダーとして適切かどうかはわからないが、書物等で研究し、何度も経験のあるかのように、振る舞い、部員も従ってくれていた。

3 年生にもなれば皆、受験勉強に取り組んでいたが、私は大学入試のことなど頭の片隅にもなかった。

(その後、山キチガイがたり、希望校には入ることが出来なかった。)

三俣蓮華岳から雄大な鷲羽岳を写した写真があるが、その時に鷲羽岳を往復した記憶がない。

山に対して、食欲な当時のことから考えて、鷲羽岳は日本 100 名山の一つであり、しかも、近くに来ており、登ったような気がするが、確信がなく、40 数年後に登頂を果たす。

いずれにしても、その日は双六池付近でキャンプを張り、コバイケソウ越しの笠が岳が雨後の夕陽に浮かんで、まぶしかったことをよく覚えている。

明日はいよいよ待望の「槍ヶ岳」に登れるかと思うと、全員キャンプサイトで盛り上がる。

いつものように、朝食、パッキング、体操等を行った後、ハイマツの続く急な坂道をあえぎながら登り、縦沢岳 (2754m) に着く。

今日は今合宿のハイライトの槍ヶ岳西鎌尾根歩きである。

一般には、北アルプスの裏銀座と言われた人気コースである。

尾根道の残雪を乗越え、何度か登下行を繰返しながら、あれほど遠くに見えた槍ヶ岳がドンドン近づいてきて、うれしくなり、皆の足取りも心なしか軽く見える。

痩せた岩稜を一旦下りて、千丈乗越(2550m)に着く。

ゴジラの背骨のような「北鎌尾根」の迫力ある姿に感動する。

これからは水平距離はわずかであるが、急な登りで「ファイト・ファイト」の掛け声も自然と大きくなり、隊の士気は高い。

私がかねてから、山は苦しくなるまでは「遊び」で、それ以降が[スポーツ]だとの持論をかかっていたが、まさしくこの山行はスポーツ以外の何ものでもない。

汗が噴出するので、タオルを頭に巻き、塩分補給に塩を舐め、疲れを取る為、氷砂糖をほおぼる。

これらの行為は歩きながら食べられ、日課となっていた。

夕方には、迫力のある小槍の横を通り、槍の肩にテントを張る。

翌8月1日は早朝に起き、槍ヶ岳山頂(3180m)に向かう。

最盛期ではあるが、当時、登行者は案外少なく、混むこともなく、スムーズに登れ、ご来光を寒さで震えながら向かえた。

360度遮るものがなく、北アルプスを始め、四方の山々がそれぞれ特徴を見せながら、朝日に浴び、我々山岳部員も、紅顔の美少年?のように、頬が染まっていた。

皆が幸せそのものに見えた。

テントを撤収し、満足感に浸って、槍沢を下っていった。

毎日降る雨にもかかわらず、行程は計画通りで、朝晩は各自平均一食につき米2合(360ml)と食欲旺盛だった。

中には茶碗の2倍くらいのカンカンに1回に5~6杯平らげる人種がいるのは驚きであった。

それでも、食糧品は充分あるので、一旦、下山して、涸沢に向かった。

個人的には槍穂縦走したかったが、1年部員も多く、まだまだ重荷の為、残念ながら、安全なルートを選択する。

槍沢の長いU字谷のくだりをひたすら歩き、横尾まで降り、逆Uターン気味に、今度は横尾谷を登る。

屏風岩を左に見て、樹林帯を抜けたところが本日の設営地の涸沢である。

オリンピックの強化選手?が急斜面でスキーをおこなっている。

雪のない少し高台にテントを張る。

今までの設営場所はほとんど尾根筋であったが、今回は岩稜に囲まれた谷底である。

本日の行程は標高1500mの下りと600mの登りで、距離も結構あった。

翌日はガラ場と岩尾根の急斜面を登り、白出乗越にある穂高小屋にでる。

鎖場の稜線を南に進み、日本第3位の高峰「奥穂高岳」(3190m)に立つ。

頂上からは北は槍をはじめ、今までやってきた各峰が、また、近くはドーム型の岩の殿堂ジャンダルムや活火山の焼岳、遠くは乗鞍、御嶽山がよく見える。

前穂のツリ尾根を快調に飛ばし、前穂高岳に到着。

食糧も少なくなり、リュックが軽く、ルンルン気分。

本日は始めて、雨がまったく降らず、心も天気も快晴そのものである。

下山にかかったところで、前のパーティが岩場から転落したため、我々は遭難者の救助を申し立てるも、自分達で出来るとのことで、我々はそのまゝ岳沢を下る。

岳沢（ダケ沢）は「ガク沢」と呼ぶほどにひざがガクガクする。

上高地に本日中に無理すれば下りられるが、手前の川原で露営することにする。

最後の夜なので、明日の朝食と昼食分を残し、残りの副食品を集めて、ささやかで豪華な夕食とする。

星空がきれいな夜だった。

上高地に下りるとスカート姿の娘さんを久しぶりに見て、しばし美しさに見とれ、「シャバ」に戻った感じがする。

日に焼けて、風呂にも入らない我々を、一般客からすると、随分うす汚い集団に思われたに違いない。

10 日間の長きにわたる山旅を終え、楽しくもつらかった山と、うれしさと寂しさが混じった複雑な思いを持ちながら山と別れを告げた。

山がドンドンと遠ざかっていった。

下山後、松本で当時は夜行列車待ちで多くの登山者に愛用されていた「信州会館」で風呂に入り、疲れと垢を落とし、夜行列車に乗り込んだ。